幼児の教育　第97巻　第12号　平成10年12月1日（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289－0836

幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

1998 12

第97巻 第12号 日本幼稚園協会

子どもが見える、保育が見える

ひらめの会　編著
編集責任／平井信義・本吉圓子・立川多恵子

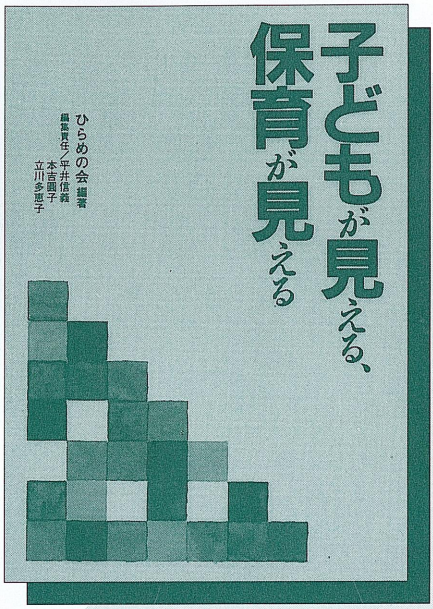
発売中

保育に花を咲かせましょう

心踊らせて保育の現場に飛び込んだものの、保育しにくい子どもに困ったなと感じたり、同僚・先輩と保育の意見がかみ合わず人知れず悩んだり、保護者との対応に戸惑うといった経験をされてはいませんか。

本書はそんな悩みをお持ちの保育者に、さまざまな角度から問題解決の糸口を示してくれる格好の保育入門書です。

明日の保育を実りあるものにしたいと努力されている方々にお勧めします。



◆好評既刊本！

A５判　288頁　定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第97巻　第12号

幼児の教育　目次

――第九十七巻　第十二号――

空に連なる地平(3)―まひるの歌―……津守　真…（4）

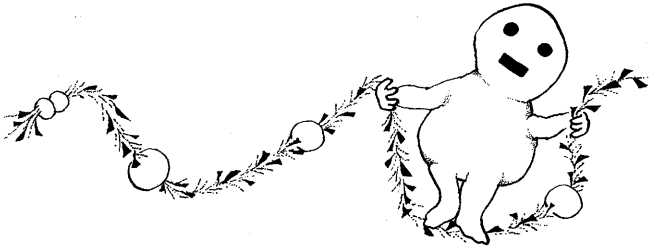
「伝統的子育て」に潜むもの
―柳田國男著『海上の道』を手がかりとして―……立浪　澄子…（13）

二十五年ぶりの教育実習
―イギリス公立幼稚園保育参加顛末(4)―……豊田　一秀…（22）

ある日の育児日記から(96)……佐藤　和代…（31）

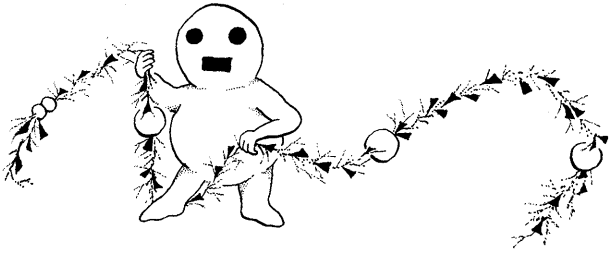
幼稚園の日々　工夫し挑戦する……樋口早百合・無藤　隆…（32）

© 1998
日本幼稚園協会



子どもの生活と音楽(5)　言葉遊び・歌遊びの世界 ……藤田芙美子…（34）
私が経験した『保母』という仕事―その二―
　子どもとのかかわりから ……四宮　美帆…（44）
子どもの本から　カエルジャンプでとびこえたもの ……大沢　啓子…（50）
保育巡回相談事例に学ぶ ……吉川はる奈…（54）
幼児の教育　第九十七巻総目録 ……（61）

表紙絵／佐藤　寛子
扉題字／津守　真
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「モール」
編集委員／田代　和美・上坂元絵里・吉岡　晶子
編集部／仲　明子



空に連なる地平(3)

――まひるの歌――

津守　真

人は壮年期に、自らの心の底の願いと現実に行われていることとの間に食い違いを体験し、その溝を埋めるべく戦う。一九六〇年代、一九七〇年代、幼児の発達と保育を専門としていた私は、自分が訓練を受けてきた実証科学の思考法と保育の実際との間に大きな食い違いを感じていた。私が子どもとの間で最も重要と思ったものが科学の網の目からこぼれ落ちていた。私が子どもの描画の研究からこのことを明瞭に意識したのは一九七〇年前後であった。東京で、ワシントンで、スウェーデンでの国際学会で、ひろく外国の学者と議論するうちに、人間科学には自然科学とは異な

る視点が必要なこと、それは世界に共通の現代の学問の課題であることを知った。

その時期、私は日々のノートを新しくし、変化して行く自らの考えの過程を記録しようと考えた。敢えてそれを引用し、人間の生涯の壮年期と老年期を考えてみたい。

一九七二年十月二十六日　生命過程の両極性

いまや私が歩んできたもののなかから、いままでの思考法のなかから、合理主義というか、いままで保育を考えるのに不毛であった思考の残滓をすべて捨てて出発すべき時が来たようだ。

一九七二年十月三十日　一の世界と二の世界と

障碍をもつ幼児を幼稚園に入れることの是非を議論する委員会があった。多くの委員が障碍をもつ子どもを園に入れることに原則的には反対しないが、それに伴う先生の負担、施設の改修の必要、人手の不足、他の子どもに及ぼすマイナスの点を考えねばならないという主張をした。病院でも内科の患者と外科の患者とはおのずから異なるところで処置せねばならぬという発言もあった。要するに障碍をもつ幼児を普通の幼稚園に入れることはできないとの結論である。この奥に感じられるのは、人を科学的思考で分断する力である。人と人との間を分断するのは悪魔（ラテン語でdiabolosという、人と人との間に何かを投げるという意味）である。私共の常識的考え方の中には悪魔がいる。だが同時に私共には真実に向かう天が備えられている。

一九七二年十一月二日

はなしを聞くことから過程について考える

夜、私は子どものベッドの傍らに顔を寄せて子

どもの話しを聞いている。子ども「バレーシューズがあたるといいな、そうしたらお誕生日に『かんむり』買ってもらうの」。その図は人から見るならば、父と子の寄り添う図と見えるだろう。私の身体の動きはひとつの表現である。夜ねるとき私は自身の仕事を中断して子どものベッドの傍らにいようとする。そこには子どもと共にいようとする心と、仕事にもどろうとする心とが同時に動いている。父と子と共にいる図は心の葛藤を内にふくんでいる。じっと留まるうちに、私は子どもと語り、共にいることをたのしみ、無心の私になり、葛藤は消える。

子どももねたくない。だからぐずぐずと着替える。いつまでも私に語りかけ、そのうちに私との会話の世界になりきる。そのときその子どもは現実からはなれて、他の世界を夢みている。自分が舞い、飛び、身を飾る空想になりきる（靴は人を別の世界に連れて行く）。私はその世界をかいま見る。これが父と子の寄り添う図である。生命過程は二面性である。

一九七二年十一月五日

子どもと共なる人生をふりかえる

日曜日の午後一杯、私は考えこんで何もしないで過ごした。子どもたちは風呂に入り、台所からは妻が焼き鳥を焼くにおいが流れてくる。

子どもがたずねる。「お父さん　クリスマスプレゼントにもらいきれなほど　もらったらどうする？」「家を建てかえるかな」と私は何気なく答える。子どもがピアノをとぎれとぎれにひく。森有正は、『バビロンの流れのほとりにて』の中で、

人は孤独な運命のなかに自分をおくことによって思索するというが、保育者は孤独とは縁遠い生活の中で思索せねばならぬ。過去十数年にわたって、私のまわりには家庭でも大学でも、常に子どもたちがいた。私は常に子どもたちの要求に追われて過ごし、そのなかで教育の本質を見い出そうとつとめてきた。私はたしかに本質的なものにふれたと思うし、私の接し方も悪いものではなかった。肝心の所にふれてきたと思う。だが、その最中に、幼児の専門家として私がとった学問の方法は外面的観察を主とする当世風であった。重要なものはぽろぽろと腕の下から抜け落ちていた。いまその本質にいくらかふれる道を見い出した。私なりに学問の思考法が転回した。その新しい目で資料を見直し、学問化することのできる時ではないか。

子どもの弾くピアノはかなり流暢になった。「ごはんができました」と妻が言う。私はこうして書いている。そんな時間がいま与えられるようになったのだ。孤独ではない運命の十年。それを考えることのできる時。いずれも私に与えられた時である。

一九七二年十一月六日　観察研究の序

観察研究の序を書いた（この頃、大学で毎週観察研究会を開いており、同輩後輩から私自身が啓発されることが大きかった）。

庭に雨が降る。雨の音。

私は観察研究について書こうとしている。思えば長い道のりのことである。私自身がこもっていることである。心理学や幼児教育の根底にかかわることでもある。この数日、このときを迎えるべく苦しんでいたようでもある。サルビアの残花が赤い。

一九七二年十一月二十九日　資料の省察

幼少時代、青年時代の感動を現在にもち来たし、過去の現象の意味をさぐろうとする試みに最近入ってきた。それのみでなく、子どもたちの幼年時代を通りすぎ、幼稚園と格闘した資料を自分のなかにもって、その現象の奥にあるものをさぐるという専門的な仕事がいまや開けようとしている。それをあせらずにやろう。いま、材料を鍋のなかにいれてぐつぐつと煮ているところである。早く煮出しすぎてはならない。ゆっくりと煮ながら、調味料を加え、材料が変質してゆくのを忍耐づよく待たねばならない。小鍋の料理は少しずつできてくる。本鍋のはまだ煮始めたばかりだ。今日は大学の創立記念日、陽ざしが洗濯物に柔らかい。

一九七二年十二月二日　幼稚園の意義

幼稚園や学校はそこで子どもが人となりうる場所でなければならない。すなわち、子どもがそこで自分の感じ方をする自由をもつところでなければならぬ。

一九七三年七月十八日　夢とその考察

一昨夜の夢

「木の根を掘り起こすと、やぶからしの根が太い根が木の根にからみついて、どちらが本物の根か分からぬほどである（やぶからしは、蔓性の植物である）。私は、その根を手でときほぐす。これではいまに地上の植物はすべてやぶからしになってしまうのではないかと思う」。

昨夜の夢

「私は何か自分の研究の報告をする。そのあとだれか現場の人の声がして『この研究には生命がな

い』と言う。私は憤慢を感じながら、それも本当なのかもしれないと思う」。

私は長い間、どこかに絶対的な知識の体系があって、それを発見しあるいは、それを作り上げることに参加するのが学問であると思っていた。はっきりとそのように意識していたわけではないし、部分的にはその逆も考えてはいたが、どこかに右のような前提があったと思う。しかし、少なくとも、子どもと人間に関する学問の分野では、そういう絶対的な知識の体系や法則があるのではなく、それを見い出すことが学問の課題であるのでもない。もしもそうだとしたら、それを見い出した人は、それを他の人に教え、それに従って考えることが教育者の課題となる。そうではない。

人間の心という未知なる世界が広がっており、私はそれにふれて、自分にとっての意味を見い出すのである。子どもの行動にふれて、それは私にとって意味のあるものとなる。私はそのことの意味を何度も発見し直し、子どものひとつの行動の分かり方が、自分にとってより根源的本質的なものにふれ、かつ、多面的になってゆくのである。

教えるということは同型のものを作り出すことではない。相手が、その人なりに子どものことがよくわかるようになってゆくきっかけとなるのである。

このことを、きょうは、学生さんのレポートを一日ゆっくりと見ていて、自分なりに考えた。他人の体験を読み、または聞くとき、そのことから自分なりに考えることができる。その人と同じところで体験したならば、聞くだけとは違ったように考えることができるであろう。また、他の人が、その人の体験をその人なりに根源にふれて、いろいろの面から考えたことを聞くことは、自分が自分なりに考えて行くのにためになる。それが

教えるということのはたらきである。

私は自分で体験し、自分なりに根源にふれて考え、その意味を多面的に考える。それを語ってゆくことは、教えるということである。

一九七三年七月十九日　記録と体験の省察

きのうのつづきを考えながら、今朝から過ごした。いま西陽が庭に射してきた。愛育研究所の家庭指導グループでは目の見えないSちゃんと出会った。今朝は発作を起して眠ってきたので、寝かせたまま遠目に見守っていた。

Tくんと一緒に怪獣の本を見た。Kくんは衣服を脱いでトランポリンをしていた。二～三人裸の子がおり、これでKくんも人目を気にしないで遊ぶようになったと思う（『子ども学のはじまり』の中の「衣服の意味」の記録はこの頃のものである）。

子どもに直接にふれる体験は、本当にありがたい。日常の大人のなかでは得られない、なまの人間が向こうからぶつかってきてくれるのである。その子どもたちと共に、生きることは、体験（erleben）することである。自分の目標を固くもってそれをさせようと思ったり、いわゆる社会の善悪の基準を両手にもって、こうすべき、べからずと思っていたのでは、子どもとのじかのふれあいの体験とならない。それをすてて、じかのふれあいにおいて、感ずるものをとらえるならば、豊かな体験となる。

保育の現場から一歩はなれて、保育のことを考える。そのときは、漠然とした動きの感じがあるのみで、とりとめもない。思えば保育の直後はいつもそうだ。放心したようになって掃除をする。

そのときに、もっともらしい理論を述べるのは場違いに思える。ひとときの後、お茶を呑みながら自分の体験を語るゆとりができる。しかし、まだ思索にはならない。次の体験が重ねられるまでの余韻体験なのだ。保育の後、モノレールにのって、Oさんの米国留学の旅立ちを見送りに羽田空港にいった。

一九七三年七月三十一日

まひるすぎ

まひるすぎ　かっとした日射しの
ベランダをみつめて
私の幼い子どもたちの姿は見えない
母親と一緒に
小学生の子どもたちは
日曜学校の合宿にいった

かっとした　まひるの
そのしあわせな日々を
追いかけられてへとへとになって戦っていた
そのしあわせな日々を

子どもたちにまひるの幸せを与えたい
どの子どもたちにも
それは人生の花なのだ
まひるの太陽　子どものひたむきに遊ぶ姿
子どもたちが眠ってしまった　遊びのあと
何年も前に過ぎ去った　遊びのあと
私はこのからだで　その遊びにふれてきた
いま　この目の前に見えないけれど
たしかに私はその傍らにいた
それが目にみえなくなってしまった後にも
そこに大切なものがあったことを示すのは

それを証する人の存在と
　それを伝えることばである
人の頭では証明できないこと
　証明をこえることがある

〈このときから二十五年が過ぎた。
　一九九八年八月二十日〉

保育者には、あるとき、活気のある現場をはなれる時が来る。子どもたちが成長したとき、保育者自身が年とった時である。その寂寥こそが人間の発達の現象である。保育の現場にあるときには、子どもの日々の必要にサービスすることに追われる。その必要がなくなったとき、保育者は本来の自分自身を取り戻す。静まって座し、人間の省察に心を向ける。そして気が付くことは、保育者は子どもにサービスをしている最中も、ひとりの人間としての自分がサービスをしているということである。社会的な所属や役割はあっても、同時にそれを離れて一人の人間として子どもと向き合い、自分で見て、判断し、行動する。そのことがなくて、立場が判断し、自分自身を失ったら、人間の保育ではなくなる。

私は一生涯に幾度その転機に立ったことか。幼かった子どもたちは社会人になり、幼稚園、養護学校の保育で格闘した子どもたちも大人になり、福祉施設でかかわった大人たちもそれぞれ自分の道を歩んでいる。いま、福祉施設の仕事に力を注いだ年月も終えて、私は初心の原点に戻って老年期の自分の道を歩む。

「伝統的子育て」に潜むもの

――柳田國男著『海上の道』を手がかりとして――

立浪　澄子

幾重にも重層化された「伝統的子育て」

現代の子育てが懐疑の目にさらされるようになって久しい。相変わらず若い親たちへの非難の合唱は止まず、少子化に対する目には険しいものもある。親たちもまた年々子育て不安にさらされ、自己実現欲求との葛藤に悩みを深めつつあるように映る。

このような時代のさなかにあって、「伝統的子育てに何を学ぶか」というテーマは魅力的ではあるが、分け入ってみると、実は思いのほか込み入っていて、手強い。

伝統とは、その語義からして重層的なものである。

様々な時代の習慣・習俗が、そのまま保存されたり、変容しながら永らえたりして、時代と共に折り重ねられてきたものである。そしてそれは今後も同様に、変化しながら折り重なっていくだろう。

言わずもがなだが、単に「過去のもの」というだけでは伝統の名に値しない。そこに潜む「普遍的価値」を突き止めない限り、「伝統」の語感にはどこか、かび臭さが漂う。

では日本の伝統的子育てが内包する普遍的価値とはいったい何だろうか。どうすればそれを取り出し、吟味し、現代に生かせるのだろうか。この問題の追求は私にとって、新しい育児文化創造の過程の一部である。

子育て習俗との関連を探る過程で、私はしばしば北陸農民の稲作にかける並々ならぬ熱意に圧倒される思いを味わった。その経験から、過去の日本人の子ども観や子育て法と稲作との関連に注意している。

大貫恵美子氏の言葉を借りれば、米は日本人の「自己メタファー」「文化的自己」[注1]であるが、私としては、コメは「我が子メタファー」、子育て対象としての「子ども」の「象徴」と考えたくなる。

一例を挙げれば、子育て儀礼には餅がつきものだという地域は少なくない。現代では餅は正月の飾りというイメージが強いが、帯祝いに始まって、お七夜、宮参り、百日、誕生、節句とそのたびに餅をつき、親類・近所に配って、共に祝ってもらう風習は決して遠い昔のことではなかった。

私が住む北陸地方では、餅はまた婚姻習俗にも欠かせないものであり、結婚式、嫁の里帰りには必ずといってよいほど餅が添えられていた。

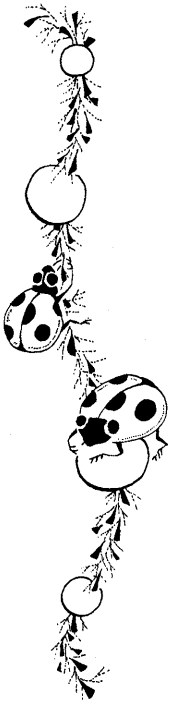
こんなにも餅が出産・子育ての節々で関わっているということは、なにか深いわけがあることのように思えてならない。

正月餅の背景については、いまの私には詳細を語る

力も余裕もない。ただ民俗学的に見れば、正月はトシガミ（年神、歳徳）を祀る祭であり、トシガミはかっては農耕の神であったらしいが、いつのころからか祖霊として祀られるようになったらしいと知るのみである。

だが、子どもの頃から「正月の餅を食べないと年をとれない」と聞かされてきた私としては、餅はトシガミの賜物であり、生命のエネルギーの象徴であると同時に、祖霊、すなわち人の完成された究極の姿の象徴でもあったのではないかという気がする。

出産・子育てにも餅がつきものなのは、コメを子どもに見立て、生まれた赤子がやがて立派に成長し、人生を終えたあかつきには祖霊となり、その生を完全にまっとうしてほしいという、親や家族の願いが込められていたのではないかと考えるのである。



「稲の産屋」を読む

この、単純といえば単純だが、民俗学的にはあまりにも大きい仮説に、我ながらとまどいつつ、手始めに柳田國男の著書の一冊をひもといてみた。

それは昭和三七年（一九六二）、八七歳でこの世を去った柳田が死の前年に出版した最後の著書『海上の道』[注2]である。彼の研究の、いわば集大成であるこの書は椰子の実の流れ来たった道に寄せる彼の雄大な思索が詰まったものである。

その中の一論「稲の産屋」（初出は昭和二八年《一九五三》）は、実は私が子育て史との関連からずうっと気に

なっている論文の一つであった。

この論文の中で柳田は「にいなめ」（新嘗）の語を取り上げ、そこからニ音を持つ語に注目している。そして稲穂を積み上げた穂積みを意味するニホ、またはニオ、あるいは九州でいうコズミは稲の産屋ではないかと言及している。

そういえば確かに、熊本県出身の私は子ども時代、刈り上げた稲穂や藁を高く積み上げることを「コーズム」と言っていた記憶がある。

柳田は「昔のH・K二子音は、今よりも一段と接近していた」例が多いことからコズミとホズミの一致を説く。

ニホについていえば、江戸時代の加賀藩の農書『耕稼春秋』（一七〇七）[注3]にも「にう」（ニオ）の記事がある。それによれば、ニオとは家の周りに稲穂一四、五〇～五〇〇束を積み上げたもので、その上にはワラガイ（藁がい）という覆いをかぶせた。さらに大きいもの（一五、六〇〇～二〇〇〇束のもの）はケラバ（蓑場）といった。

ケラとは蓑の方言で、『日本民俗語大辞典』[注4]によれば、秋田県のナマハゲに代表されるように、蓑・笠をつける装束は「神なり」、すなわち神が姿をやつすときの古くからの方式だという。そしてミノの方言にはミノマブシ、マブリなどの語もあるという。

柳田は注意深く断定を避けているが、彼の想像の中ではおそらくニオ、ニフ、ニュウなどの語はニブ、ミブ、マブを経て、ウブ、オブへとつながっていたのではないだろうか。そしてそれはもしかしたら稲魂―ウブ（産魂）へと昇華していたのかもしれない。

『民俗地名語彙事典』（下）[注5]によれば、ニオ、ニュウ、ニフには普通「丹生」の字が当てられる。丹とは水銀を含んだ深紅色の土のことであり、この語には稲魂との関連が指摘されるという。その根拠は「古くニホに祀られる米が赤米であったのではないかとの推測も成

り立つ」からである。

この項を読んで思わずはっとしたことがある。前出の『耕稼春秋』に出てくるワラガイの藁には、普通の藁と共に、大唐という赤米系の品種の藁が使われるという記載を思い出したのだ。

『日本民俗語大辞典』のニオ（丹生）の項には「福岡県八女郡では藁コズミの上に藁製の笠形をのせ、ワラトベ、トツワラ、サンダワラボッチなどといい、これをのせたものだけを、ニオと呼んでいるが、九州の各地で、トビ・トボシ・トワラなどと呼ぶのもこれで、古くはネトブサと同じく収穫物の上に、その一部をおきたてて、農神乃至年神を招きおろすための依代とし、それらの神に豊産の感謝祈願をあらわす響食を供えた名残ともいえる。」という記述がある。

さらに「トビ」を見れば、トビには「賜」の字を当て、これは贈り物の意味であり、トブサは「鳥総」で占有標の意味だという。

私はここでまた、北陸では広く尖端や突端をトンボ、トンボサキと表現することを思い出した。何か関係があるのではないだろうか。

川崎真治氏によれば、日本の赤米の代表にタウ・ボウシ（唐法師）という名の品種があるそうだ。[注6] 一七八九年に完成した加賀藩越中礪波郡の農書『私家農業談』[注7]にも「唐干」という稲の品種の記載がある。もしトブ、トボシがこのタウ・ボウシから来ているとしたら、トンボも元はトボシの仲間で、「招き代」の意味だったかもしれない。

『日本民俗語大辞典』に苫はトボシと無関係ではないとあった。はたして、『私家農業談』には、ニオの上に「『藁がい』といって藁の苫を一枚ずつかぶせておく」の記載がある。しかもこのワラガイは「大唐稲の藁で作る」と、『耕稼春秋』と同じ内容であった。

『耕稼春秋』の著者が著した『農業図絵』（一七一七）[注8]には当時のニオとケラバの写生があるが、ワラガイの

中心はいずれも突き立っており、いかにもトンボ（突端）にふさわしい（図参照）。

やはりニオ、ニュウは稲魂の籠もる稲の産屋なのかもしれない。そして苫（あるいはトボ、トンボ、ワラガイ）は稲魂の下りくる依代、その苫の下に籠もる米が赤い血の通う生命（赤子）の象徴だとすれば、ウブヤのウブもまた魂を意味することになる。

ウブのウが稲の産屋としてのニュウの名残だとすれば、柳田が別稿[注9]で指摘するように、稲魂をウケノミタマ、またはウカノミタマ（字介乃美太萬―倉稲魂）と呼ぶのもすんなりと納得がいく。

シラは子宮？

もう一つ、「稲の産屋」のなかで私の注意を引いた語があった。それはシラという語である。

八重山諸島に残るシラという語は稲積と産屋の両方の意味を持ち、沖縄諸島では広く人間の産屋をシラという。柳田は「かつては日本の西南一帯の地にも、産屋をシラと言った時代があったのではないかと私は考えている」と記している。

私が育った有明海沿岸の一小村では母屋と別棟の作業場、納屋などをよくコヤといったが、そのコヤが産屋として使われたかどうかは知らない。だがコヤは民俗学的にはあきらかに産屋の別称である。[注10]

産屋としてのシラは聞いたことがなかったが、未成熟の籾をシイラと呼ぶことは覚えていた。母などが「今年はシイラが多いから、（米が）よくとれんだろう」などと言っていたのが耳に残っていたのだ。

『綜合日本民俗語彙』第二巻[注11]によれば、シイラは「中国地方で、稲積のこと」、シラは熊本県芦北郡で「籾殻」とある。『日本民俗語大辞典』ではシイナ（粃）のことであり、実のいらぬ籾、もしくは籾殻をいうとある。

はたして稲積、または産屋としてのシラと、粃の意

味のシラは関連するのだろうか。

もし籾殻または空洞の籾を子宮と考えたら、そこに詰まっているコメは子である。籾がコメの子宮であり、稲積が稲魂の子宮だとしたら、シラとは、現代の考え方では、子宮を意味することになるのではないか。

今も妊娠することを「ミゴモル」というが、これは「身籠もる」であろう。柳田は「コメはコメルという言葉と類似した意味があり、普段は忌んで用いなかった神聖な言葉のように思われる。或は殻霊のこもっていると云った感じがあったか（後略）[注12]」と述べている。

最近、白石昭臣氏も「かっては田の中で行われていた稲魂誕生の儀礼が、家の中で行われるようになり（中略）、祭場の異動に伴う家意識が誕生した」ととらえ、このような家意識の発生は「地域差はあるが、近世初頭かと思われる[注13]」と述べている。

そして祭場の異動は稲魂の象徴を「稲穂―籾―餅」へ、祭祀の形態を「ホカケ（穂掛け）―担い下げ―担

▲中央に大きなケラバ二つが見える
土屋三郎絵「農業図絵」
『日本農書全集』第26巻 1983年、所収

ぎ上げ―安置」へと変化させることになったと説く。習俗の重層性を如実に考えさせる事例ではなかろうか。

稲作に学んだ日本人の子育て

さて、これまで述べてきた事例・推測は、全体からすればまだまったくの断片、それもきわめて周辺的な切れ端にすぎないが、私は次のようにまとめたいと思う。

コメを神の賜として、稲に魂の存在を認めてきた古代の人々は稲積を稲魂の産屋と考え、稲魂はこの産屋に翌春までじっと籠もって命のエネルギーを蓄えると考えたのであろう。もし人々が人間の魂と稲の魂とを同種のものとしてとらえていたとしたら、人間の魂もどこかにじっと籠もって生まれ出る時を待つと考えるであろう。

もちろん現代の考えではそれは母親の子宮であるが、その知識が古代の人々にあったかどうか。むしろ、稲積と同じように、実際に産屋を作って、そこに妊婦を籠もらせ、生命の誕生に備えたと考える方が自然ではないか。

そう考えれば、今まで多くの民俗資料が伝える産屋の習俗も、ハラオビ（腹帯）の習慣も、ほとんど説明がつくように思われる。

このように考えれば、われわれの祖先はまさに稲作に子育てを学び、子どもを稲魂になぞらえ、だからこそ、「子宝」思想を生み出し得たのではないだろうか。

その過程では、種籾を水に漬け、不良籾を選別する技術と同様に、生子を選別し、不要の子を「オカエシスル」方便を身につけたこともあった。

しかし、稲作からどんどん遠ざかっている現代の日本では、子育てはもっとも深いところでその根を枯らしつつあるのではないだろうか。人間の命の糧を身近にとらえにくくなり、ひいては「自分は何のためにこ

の世に存在するのか」という自己規定や、人間として生きる意味を子どもたちが年々見出しにくくなっているということはないだろうか。

ここに、伝統的子育てに学ぼうとするときの、私たちが看過できない深刻な問題点が潜んでいると思う。これからの子育てを考える場合、私は少なくともこのことだけはいつも頭におきつつ、問題に取り組んでいきたいと考えている。

（長野県短期大学）

注

1 大貫恵美子著『コメの人類学』岩波書店　一九九五年
2 柳田國男著『海上の道』筑摩書房　一九六七年
3 『日本農書全集』四巻　農文協　一九八〇年　六四頁
4 石上堅著『日本民俗語大辞典』桜楓社　一九八三年
5 『日本民俗文化資料集成』一四巻　三一書房　一九九四年
6 川崎真治著『古代稲作地名の起源』新人物往来社　一九七六年　二三七頁
7 『日本農書全集』六巻　農文協　一九七九年
8 『日本農書全集』二六巻　農文協　一九八三年
9 『定本柳田國男集』三一巻　筑摩書房　一九六四年　一五九頁～一六六頁
10 雑誌『民間伝承』二〇巻一〇号　一九五六年　二八頁
11 『綜合日本民俗語彙』二巻　平凡社　一九五〇年
12 柳田國男著「海上の移住」『民間伝承』一八巻七号　一九五四年　六四頁～六五頁
13 白石昭臣著『イネとムギの民俗』雄山閣　一九九四年

二十五年ぶりの教育実習

―イギリス公立幼稚園保育参加顚末(4)―

豊田　一秀

目に見える小さな「現れ」は、その背後に存在する大きな問題を示唆している場合が多い。この事は保育に関しても当てはまる事である。前回、九月号の誌面で、私は幼児の要求に応えるべく繰り返し冠作りをして、ある女児との関係を深めて行ったエピソードについて述べた。そして、その中で、イギリスの子どもが余り保育者に対して要求をしない事について原因を類推した。幼児から保育者への要求や働きかけ、誘いが少ないという事は、保育者からの幼児への要求が幼児からのそれに勝っている、もしくは、保育者と幼児の関係性に於いて、幼児が保育者から「与えられる者」として存在していると見る事も可能であろう。この事

は「幼稚園とは何をする所なのか」という大きな問題にも係わってくる事柄である。今回は、イギリスの保育者の計画、動きや配慮を通して、イギリスの教育行政の求める教育内容と日々の保育との関わりについて検証してみたい。

「与える」保育と教師の役割分担

私が保育参加を許されている公立幼稚園の概要については、連載二回、六月号に既に述べたので、ここでは詳細を省くが、各クラスは約二十五人の幼児に対して基本的に常勤の職員二人（資格は教師と保母）と非常勤の保母二人の合計四人の保育者によって運営されている。四人の保育者の役割分担は流動的であるが、一日の保育は以下のような流れで始まる。少し長くなるが六月号から引用する事をお許し頂きたい。

「さて、その日、先生のクラス全体への言葉かけは、九時二十分に出欠をとる事から始まった。九時に登園

▲先生とゲームをしながら数の勉強。無理にやらせる事はないが、ゲームのやり方は前以ってはっきりと決まっていて、幼児はそれを守らなければならない。

した子どもは二十分程車座になってカーペットの上で待っているわけである。絵本を出したり友達と軽くふざけたりしている。出欠を取り終わると先生はテーブルに用意されたいくつかの活動について説明する。その日に先生が用意した活動コーナーは1、ケーキ作り 2、粘土　3、屋内用の水遊び　4、文字ならべ、であった。先生は初めに五、六人の名前を呼んでケーキコーナーに行くように指示する。ケーキ作りには定員があるのだろう。呼ばれた子どもはボールや粉の置かれた机に座る。呼ばれなかった子どもが自分もやりたいと言ったり、呼ばれた子が他の活動をしたいと言ったりすることはない。スムーズに事が運ぶ中に、子どもたちがまだ自分を出していない感じを私は受ける。他の子どもたちは、めいめいに興味を持った机に行く。机ごとに先生が座って指導する。何しろ先生は四人も居るのだ。前述の四種類の活動の他に子どもたちは絵本を読んだり、レゴや積み木で自由に遊んでも良いが外で遊ぶ自由はない。安全確保のため、先生が外にいる時でないと子どもは外で遊ぶ事はできない」。

この記述からも分かるように、イギリスに於いて複数の保育者がクラスに存在するという事は、第一に、幼児の活動に対する選択の幅を保障するものとして作用していると言えよう。祭りの時に、多くの屋台が出ていた方が、その中から子どもが好きな店を広く選べると例えたら良いだろうか。ここでポイントとなる事は、基本的に幼児は活動を選ぶ事が許されているが、その選択には保育者が用意した範囲の中からと言う枠組が条件として付いているという事である。そこには保育者によって設定された活動以外のモノを幼児が選ぶ自由はない。保育者＝与える者、幼児＝与えられる者と言う図式が存在している。そして、この考え方の奥には、幼児が自らの力で工夫して各人の生活を作り出して行く事よりも、保育者が前以って計画した、幼児に良かれと考えた計画を幼児に与える事に価値を置

▲自由な遊びの時間。先生たちはお茶を楽しみながら子どもたちの遊びを見守っている。

いた保育観が存在している一つの証左になるだろう。

保育者が「与える事」を強く意識した保育は一つの特徴を持っているように私は思う。それは、保育者が十分に「与えた」と感じた後にはそこから先に活動が続かないと言う事である。私の参加しているこの幼稚園では一つの活動が済むと自由遊びの時間となる。多くの子どもは園庭で遊ぶが、この時間は子どもにとっても、また保育者にとっても息抜き的な時間となっている。この時の保育者の最大の役割は幼児の安全管理であり、保育者はほとんどの場合幼児と遊ぶ事はない。保育者はこの時間、紅茶等を飲みながら幼児の遊びを見守っている。イギリスの伝統であるティータイムはここでも顕在である。また冒頭に述べたように、この時間、幼児から保育者を遊びに誘ったり、困った事の解決を保育者に求めたりすると言ったような、幼児からの保育者への働きかけも少ない。又、この時間、子ども達は与えられた時間の長さを知っていて、

深く遊び込む事が少ない。そして、次に保育者に呼ばれると、すぐにその活動に移って行く。

一日の保育における四人の保育者の役割分担を次頁の表に示したが、この表からもうかがえるように、一日の保育を予定通りに消化するためにかなり細かい役割表が作成されている。この表を見ていると、あたかもスムーズに舞台を進めて行くための演出のスケデュール表のような趣を感じてしまうのは私だけであろうか。幼児は観客＝受け手なのである。

イギリスの行政による幼稚園教育のねらい

私の参加している公立幼稚園において、保育の形態が幼児に「与える事」を色濃く出している点について示してきた。イギリスの幼稚園のこのような在り方は、一体どこから来ているのであろうか。イギリスの伝統的な教育風土、両親の期待等、様々なものが要因として絡み合っていると思われるが、ここではイギリスの幼稚園の保育内容、保育方法を規定しているイギリスの行政による幼稚園教育のねらいに目を向けてみたい。

日本の教育要領は五つの領域から成っているが、イギリス版教育要領とも言うべき『幼児の学び（学習）へ向けての望ましいねらい』（DESIRABLE OUTCOME FOR CHILDEREN'S LEARNING）では、以下のように六つの項目に分けて、そのねらいについて述べている。

①個人的、社会的発達、②言葉と文字、③算数、④世界に対する知識と理解、⑤身体的成長、⑥創造性の発達。これらの項目を一瞥しただけで、日本の五領域と比べその性格が大きく異なっている事に気付く。第一に感じる違いは、幼児に対し大人の計画した事柄を学ばせたいと言う姿勢が強い事である。この点を日本の「教育要領」と比較してみると興味深い。すなわち、教育要領の中では幼稚園教育の目標について五項

表　日案の枠組みと４人の保育者の役割分担の一例

時間	予定	担当教師
9：00	幼児を迎える、出席	A先生
	課題活動	B先生
9：15	外遊び一回目	A、C先生
	その後の外に出た子ども担当	B先生
9：30	言語のグループ指導Ⅰ	C先生
10：00	お話／フルーツ	B先生
	教師休憩1	A、D先生
	教師休憩2	B、C先生
10：30	課題活動	A先生（C先生補助）
	水遊び担当	B、D先生
	片付け	B、C先生
11：00	部屋に集まって何かする	B先生
(同時進行)	言語のグループ指導Ⅱ	C先生
11：30	昼食	A、C、D先生　午後はD先生は帰宅
12：00	教師休憩	B先生（休憩室で昼食）その後A、C先生も
12：30	一日保育の子どもを外で担当	C先生
1：00	午後の子どもを迎える	B先生
	課題活動	A先生
1：15	外遊び一回目	B先生
	その後に外に出た子ども担当	C先生
2：10	お話／フルーツ	B先生
	その後自由遊び	C先生
2：30	そうじ室内 （子どもは軽く手伝う程度）	A先生
2：45	そうじ室外	B先生
3：00	集まり	A先生
3：20	降園	

目に渡って述べているが、その中で「養う」「培う」と言う言葉が多く使われていて、幼児の内面からの育ちに重きが置かれている。第二に、全般的な傾向として、知育的な発達を求める姿勢が直截に出てきている事である。次に各項目の内容を簡単に見渡してみよう。

①個人的、社会的発達（幼児の学習、遊び、及び友達との協力等の習得に焦点を当てる）

・自信と自己信頼を持つ。
・適切な行動をとり、正しい事、間違っている事に気付く。
・進んで順番を守り、公正に分け合う。
・他の文化や考え方を尊重し、人と良い関係を作り、人の気持ちに対し感受性を持つ。
・文化や宗教的行事、もしくは他の体験に対して驚きを持って臨む。
・個人でも、またグループでも良く学び取ろうとする。
・集中し、我慢強くやり通す。
・実行力を持つ。
・自分の事は自分でする。

②言葉と文字（話す事、聞く事の能力獲得に焦点を当て、読み書きの能力の発達も促す）

・お話や歌、詩を注意深く聞き、感じた事について話す。
・自分の考えを話したり、物の意味を知ろうとする機会を多く持ち、語彙を増やす。
・自分で話を創ったり、ごっこ遊びをしたりする。
・本に親しみ、絵や文字が意味を持つ事を知る。ページや内容が左から右へ進む事を理解する。
・自分の名前、いくつかのなじみのある言葉、アルファベットが分かる。
・言葉、文字、音節、そして詩の韻が音声と一致す

る。

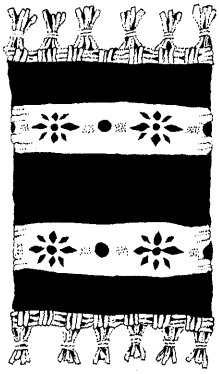
・自分の名前や親しい言葉、絵やシンボルを書いて、色々な場面で思いを伝えられる。

③算数（簡単な数学的な考え方、及び言葉の理解。数の基礎の発達に焦点を当てる）

・物の形、位置、サイズ、量を現すために数学的な言葉を使う。

・数学的な考え方を知り、試す。

・分け、比べ、物を順番に並べる。



・数の韻、歌、お話、数を数える遊びに親しむ。

・十まで数え、読み書き出来る。

・実際の物を使って、足し引きの関係した簡単な問題を解く。「足す」、「もう一つ」、「一つ取る」、「全部でいくつ」、「いくつ残る」等の言葉が使える。

④世界に対する知識と理解（幼児の一般的知識の発達をめざし、身近な環境、他の人々の生活、そして自然と世界の未来に対する理解に焦点を当てる）

・家族の過去や現在の暮らし、身の回りの環境、将来の目的などについて話す。

・生物の有り様や将来などについて考える。又、自然のパターンや変化、類似や相違等について知る。

・様々な事柄がなぜ起こるのか、どのように作用するのかについて観察し、記録した事について話す。

・切断し、接続し、折り曲げ、組み立てるような材料を選び使う。

・この分野の学習の助けになるような技術を習得する。

⑤身体的成長（屋内、屋外における身体のコントロール、運動性、空間感覚の発達に焦点を当てる）

・身体のコントロール、共応、空間感覚の発達を促し、同時に自信、想像力を持って行動する。

・大型、小型の道具、平均台や登坂用の機具を使い、技術を進歩させる。

⑥創造性の発達（幼児の想像力、伝達能力の発達、そして考えや感じ方を創造的な方法で表現する事に焦点を向ける）

・二次元、三次元の空間で、色彩、音、感触、形を探求する。

・幼児が見、聞き、嗅ぎ、触り、感じた事柄に対して、色々な方法で反応出来るようになる。

・美術、音楽、ダンス、お話、空想ごっこ等を通して観察力を伸ばし、想像力を養う。

・広い範囲の素材、適切な道具、楽器等を使い、考えを表現し、思いを伝える。

以上

イギリスの幼稚園でごく普通に見られる場面の背景を探るべく、成文に見られるイギリスの幼児教育のねらいを見渡してみた。そして、日本と比較してそれが学習的な色彩を持つ事、知育に比重が置かれている事について述べた。このような傾向を示すのには幾つかの理由が挙げられる。次回は、この理由について考える事から始めてみたいと思う。

（ローハンプトン　インスティテュート　ロンドン客員研究員）

ある日の育児日記から

(96)

佐藤　和代

ある日の夜中。私の隣で眠っていた有が急に泣き出しました。「どうしたの？」声をかけると、布団の中で抱きついてきて、泣きながら言うのです。「お母さん、ぼくが死んじゃったらどうする？」私は有をぎゅっと抱いて、「お母さん、泣いちゃうよー」と答えました。しがみついて泣き続ける有。何か夢でも見たな、それにしてもこんなふうに抱きついてくるなんて久しぶり。うふふ、ちかごろ生意気になったと思っていたのに、まだまだ幼いところあるじゃない。

「何の夢だったの？」

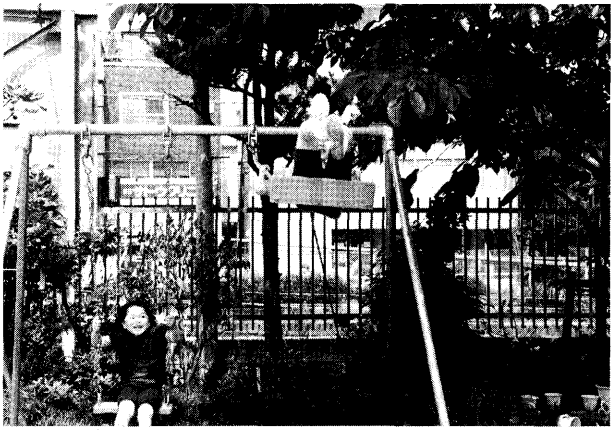
「あのね、海で、おぼれたの。ぼくもう、海行かない！」あいかわらず私にだきついたままの有。泣き声で目をさました敬が、見透かしたようにひとこと言いました。

「有ってかわいい！と思ってんだろー」。そりゃ、母親の役得よ。これをかわいいと思わずして何とする。

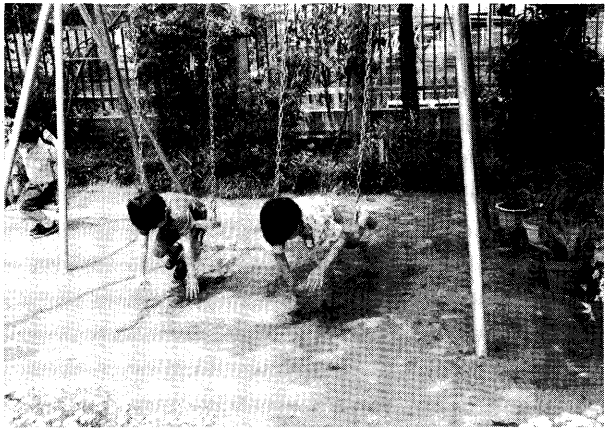
なんてにやにやしていた私ですが、はっと我に返りました。海で、おぼれる？　それってもしかして……「有くん、おしっこ、いきたいんじゃないの？」有はようやく顔をおこして、「うん、出そう」

「早くトイレ行ってきなさい！」やれやれ、布団ぬらされずにすんでよかった。

▶難しいことに挑戦している。ただ渡るだけじゃ物足りないからか。



◀ブランコは実はこんなところに目標があった。葉っぱに足が届くくらいに高くこげるのが一つの目安



▶ブランコも普通に乗ったらつまらない。うつぶせになりながら、揺れにまかせて砂かきをしている。

写真・樋口早百合
解説・無藤　隆
協力・目白幼稚園

幼稚園の日々

工夫し挑戦する

平均台の上に登り、地面を歩くのでも難しいやり方で渡ろうとする。慎重に一歩一歩を探りつつ進んでいく。気持ちは足先に集中する。落ちたらどうなるのだろう。谷底にまっ逆さまだ。いや実はどうということもない。砂地に落ちてしりもちをつくくらいだ。子どもの挑戦は大冒険でもあり、安全なものでもある。遊びに気持ちが向かえばすごいことをやっているように思える。ちょっと距離を取れば、いつもの遊びだ。でも、いつもの遊びでも、ちょっとやり方を変えて、集中すると、冒険の世界に入ってしまう。小さな工夫が大きな冒険に向かう鍵となる。

▶うんていにぶら下がりながら、足元でプラスチックの筒をごろごろと転がす。まるでピエロのよう。

◀ひとりシーソー。板をちょっと乗せただけでシーソーになった。

子どもの生活と音楽(5)

言葉遊び・歌遊びの世界

藤田芙美子

ここ三回の連載は、初期の音楽行動が現れる一歳前後の子どもたちに注目し、この年齢の子どもたちが、周囲にある音や音声にどのように反応し、自ら音楽的なまとまりのある動作や音声を作り出しているかを明らかにすることを試みてきました。立つこと、歩くこと、言葉を話すことなど、人間として基本的な技能を獲得する画期的な年齢である一歳前後の子どもたちは、心身の発達と相まって、周囲にある音響を組織づけて音楽的に表現する方法もまた着々と習得していました。子どもたちは、周囲の人々と関わる中で経験する音響を、自身の呼吸周期ごとに組織づけるという音楽的な行動の構造枠[注1]を身につけると同時に、この構造枠にしたがって音響をさまざまに構成することを日々試みていました。周囲にある音響を組織づけようとする行為は、言葉を獲得する以前の喃

語期に既に現われていて、言葉の音響面を形作るために大きな役割を果たしていることも明らかになりました。

子どもたちは、いくつかの言葉を獲得すると、今度はその言葉を音楽的に用いて周囲の人々に働きかけるようになりますが、さらには言葉の音響面の表現をさまざまに変化させて楽しむようになります。今回は、子どもたちが音楽的な表現を工夫し、楽しむ言葉遊び、歌遊びの事例をとりあげて、それはどのようにして作り出されているのか、その楽しさとは何かを、特に音楽的な側面から考えてみることにしましょう。

否定語による応答

二、三歳になると、子ども同士の言葉による応答場面が急速に増えてきます。この年齢の子どもたちの応答で特に目だつのは、相手の言葉を否定する応答が現れ、これを好んで度々行うようになることです。二、三歳児の否定語による応答唱をとりあげて、子どもたちが否定語の応答を何を手がかりとして作り出しているのかを探ってみましょう。

事例1　「危ないよー、危ないよ」

一九八九年七月五日[注2]

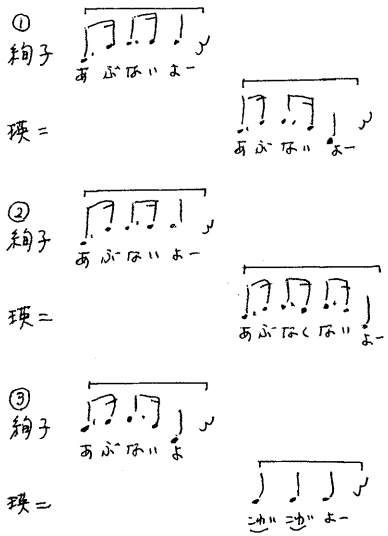
東京の小金井市にある、愛の園保育園の二歳児クラスの子どもたちは、久しぶりに雨があがった園庭で自由な遊びを楽しんでいます。瑛二（えいじ）くん（二歳一〇ヵ月）と絢子（あや）ちゃん（二歳四ヵ月）は、観察者の一人に助けられてジャングルジムを登り、高さ一メートルほどの所に、約一・五メートルの間隔を置いて向かい合って設置されている木馬の腰掛に座りました。瑛二くんは、高い所に座っているのが少し怖いようで、しっかりと手すりを握り締めています。

絢子ちゃんの方は、辺りを見回したり、木馬の頭を手で叩いたり、近くを通った保育者

に向かって「見て！」と叫んだり、この場所がとても気に入った様子です。

しばらくすると、砂場で遊んでいた年長クラスの子どもが「水たまりあるからあぶないよー」と何度か叫ぶ声が聞こえてきますが、それを耳にした絢子ちゃんは、瑛二くんに向かって大きな声で「あーぶ・なーい・よー」とリズミカルに叫びました。それに対して瑛二くんは、少し間をおいてから、「あーぶ・なーい・よー」と反復して答えます。この応答を二回繰り返したあと、絢子ちゃんが再び「あーぶ・なーい・よー」と叫びますが、瑛二くんは少し考えてから、「あーぶ・あっく・なーい・よう」と絢子ちゃんの言葉を否定する言葉でリズミカルに答えます。瑛二くんは「あぶなくない」という発音がしにくいようで、口ごもるように言います。このあと瑛二くんが呼びかける側になったり、お互いの言葉のニュアンスを変えてみたり、「こわい・こわい・よー」と言葉を入れ替えたりしながら、二人は、この応答をなんと五十八回、七分間も続けました。二人の応答唱は、回を重ねるにしたがって、言語的にも音楽的にも安定し、整ったものになってゆきました。

図1　「危ないよー、危なくないよ」



絢子ちゃんと瑛二くんの応答は、二歳児が、言葉を、音響的、時間的に秩序づけ、その一部を入れ替えて否定語を作り出す過程を良く示しています。絢子ちゃんが「あーぶ・なーい・よー」と叫んだのを聞いて、最初、瑛二くんは、その呼吸の長さに自分の呼吸を合わせて、

「あーぶ・なーい・よー」と反復しました（図1の①）。絢子ちゃんと同じように、ひと呼吸の時間単位を「あぶない」と「よ（お）」の言葉のまとまりで二等分し、さらに音節のまとまりにしたがって「あぶ・ない・よ・お」と下位分割して拍節的に唱えています。応答を繰り返すごとに、二人の息はぴったりと合うようになり、拍節にのった、安定した旋律の応答唱が作り出されるようになります。

このあと、瑛二くんは、絢子ちゃんの「あーぶ・なーい・よー」に対して、「あーぶ・なーく・なーい・よう」と否定する言葉で応答するようになりますが（図1の②）、それは、瑛二くんがそれまでの応答で既に確立している、ひと呼吸の時間単位を四等分する拍節の第二拍目と第三拍目の言葉「ない・よー」を「なく・ない・よー」に入れ替えることによって作り出されるのです。次に瑛二くんは「こわい・こわい・よー」と応答（図1の③）しますが、これもまたその時の瑛二くんの気分にぴったりした言葉を、既に確立している呼吸単位の拍節に当てはめて作り出したものです。拍節にのって、言葉や音節をまとめたり、分割することを経験する、この種の言葉遊びは、二歳児が、日本語の意味を損なわない言葉や音節のまとまりを探索し、学ぶために格好の機会を用意していると言えるでしょう。

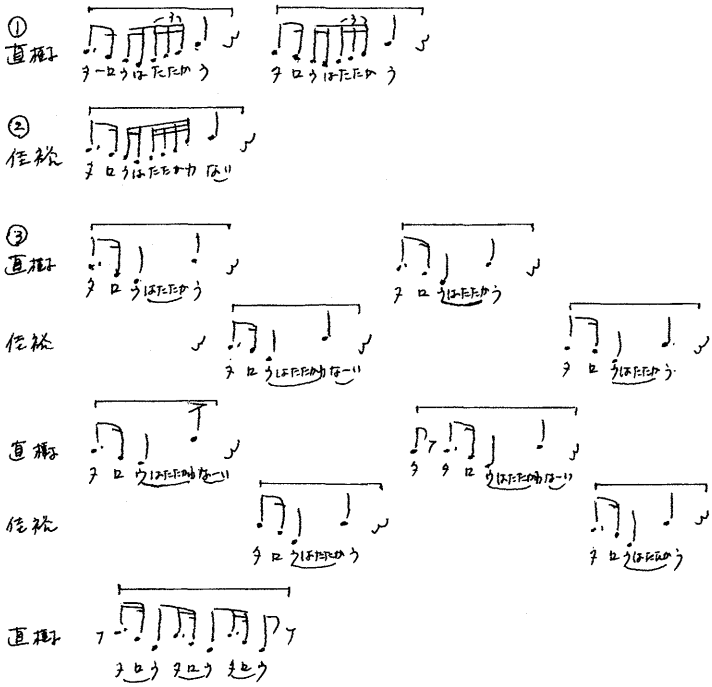
絢子ちゃんと瑛二くんの応答唱は、伝承的な絵描き歌の一節「はっぱかなー、はっぱじゃないよ」を思い起こさせます。この絵描き歌は、否定語による応答であること、呼吸配分、言葉の分割の仕方など、絢子ちゃんたちの応答と非常に似た構成になっています。伝承的な言葉遊びもまた、子どもたちが絢子ちゃんたちのように、呼吸を合わせ、リズミカルに言葉を唱えるうちに、否定語を組み込んで作り出されたものなのでしょう。

事例2　「タロウは戦う、タロウは戦わない」

一九九一年七月二十二日[注3]

朝のお集りのあと、こひつじ保育園三歳児クラスの子どもたちは、涼しい東側のテラスで粘土遊びをすること

図2 「タロウは戦う、タロウは戦わない」



になりました。テーブルの上に板を敷いて、子どもたちは思い思いの粘土づくりをしています。直樹くん（三歳五ヵ月）は、粘土をこねているうちに、どんどん形が変わるので、それを見ながら作るものもどんどん変えているようです。最初は細長い粘土に作り上げて「へびだー」と向かい側の席の佳裕（けいすけ）くん（三歳十一ヵ月）に見せました。それを見た佳裕くんは、自分も粘土を細長くして「へびだー」と叫びます。二人は、互いに関わり合いながら粘土づくりに熱中しますが、そのうち直樹くんは、怪獣づくりに転じます。そして次には、アニメの主題歌「ウルトラマンタロウ」の旋律の断片を鼻歌で歌いながら、ウルトラマン作りに挑戦し始めました。しばらくして、佳裕くんが、ウルトラマンらしきものを作り上げると、それを見た直樹くんは、粘土をこねる手を休めて、何かを思い出すよ

うな、うっとりとした表情で「タロウはたたか・うー」「タロウはたたか・うー」と二回繰り返して歌いました（図2の①）。旋律はやや一本調子ですが、リズムは、原曲の「ウルトラマンタロウ」の通り、正確に歌っています。佳裕くんも歌い始めました。「ターロウはたたかわ・ない」（図2の②）。直樹くんに呼吸を合わせて、呼応するリズムで歌います。二人は、この応答唱を四回続け、最後を直樹くんが「タロウ、タロウ、タロウ」と歌って完結しました（図2の③）。

子どもたちは、三歳頃になると、テレビのアニメ主題歌を頻繁に歌うようになりますが、一般的には、まだ、その断片を一本調子に歌うにすぎません。しかし、リズムは驚くほど正確にとらえています。子どもたちが既成の歌を、旋律よりもまず、リズムを正しく歌えるようになるのは、彼等が、既成の歌もまた、事例1の応答唱と同じように、呼吸を調節し、歌詞のフレーズや単語、そして音節のまとまりを時間的に組織づけることを手がかりにして歌うからに他ならないのです。

不思議な七五調の唱え言葉

二歳、三歳の子どもたちは、言葉の意味を成さないが、七音節、五音節のまとまりがあるという不思議な唱え言葉を作り出します。

事例3　「わいたくかみで、えいぱくまー」

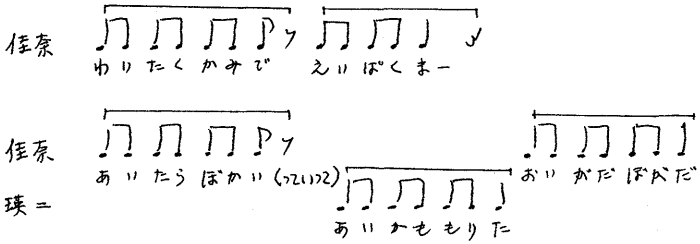
一九八九年五月二十四日

さわやかな五月の朝、愛の園保育園二歳児クラスの子どもたちは、近くの公園に出かけました。佳奈（かな）ちゃん（二歳六ヵ月）と瑛二くん（二歳八ヵ月）は、砂場で、ケーキ作りに余念がありません。両手で砂を掬っては、コップに入れ、そのあと、手のひらで叩いて固めます。これを逆さにしてコップを外すと見事なケーキが出来上がります。しばらく遊んだあと、佳奈ちゃんは、砂を詰め込んだコップを片手に持って、滑り台の方へ駆けてゆきました。そして、右手にコップを持ち、左手で手すり

を握って、やっとの思いで階段を登りきりました。コップを持って階段を登るのが大変なことに気がついたのでしょう、佳奈ちゃんは、コップをそこに置くと、そのまま手ぶらで滑り降りました。二回目は、佳奈ちゃんに続いて、瑛二くんも砂を詰め込んだコップを持って階段を登りました。佳奈ちゃんは、階段を登り終わるやいなや、置いてあったコップを手にとり、砂がこぼれないように右手でとんとんと叩いてから、砂場の方向の手すりの上に置きました。そしてこのコップを大事そうに両手で支えて、遠くに向かって大きな声で叫びました。「わいたくかみで、えいぱくまー」。一音節ごとに首を前に振って調子をとっています。やはりコップを手すりに置いて、佳奈ちゃんと並んだ瑛二くんは、すぐにそれを真似ようとして、小さな声で「えいぱくぱくと」とつぶやきました。すると佳奈ちゃんは、瑛二くんの方を向いて「あっちいって」（あっちに向かってという意味らしい）と、遠くを指差したあと、「あいたらぼかい」て言って、と模範を示しました。すると瑛二くんは、「あいかもも りたー」と、佳奈ちゃんの発声と同じ呼吸の長さで、しかし、二拍目以降の音節を変えて大きな声で唱えます。それに続けて佳奈ちゃんは「おいがだぼがだー」と答えて、一連の応答を完結しました（図3参照）。

佳奈ちゃんと、瑛二くんの応答は、まったく意味を成さない言葉でのやりとりであるために、一見したところ、コミュニケーションの成り立たない、でたらめの応答のように見えますが、二人の応答を音楽的な面からみますと、そこには見事な

図3　「わいたくかみで、えいぱくまー」



音響構成と、コミュニケーションが成立していることに気が付きます。佳奈ちゃんも、瑛二くんも、ひと呼吸を八等分する七音節、あるいは五音節でまとめています。二人は、口調の良い唱え言葉、すなわち、お互いの呼吸を合わせ、リズミカルに発声するという行為によって、一緒に作った砂の詰まったコップを持って、苦労して滑り台の階段を登り、こんな高い所までやってきたという、共有する嬉しさ、誇らしさを、伝え合い、分かち合っているのです。

何故、七音節、五音節にまとめるのか、については、もっと数多くの事例について、さらに詳しく調査する必要がありますが、この年齢の子どもが、周囲の音響のまとまりに、ひときわ敏感であることから考えて、子どもの周囲に豊富にある唱え言葉やわらべ歌、そして童謡に支配的な七五調の音のまとまりを既に身につけているからではないかと思われます。私は、音楽的なコミュニケーションとは、このように、人が他者と呼吸を合わせて、音響的に意味のあるあり方で声を音を組織づけることによって、お互いの気持ちを伝え合い、分かち合うことに他ならないと考えています。

替え歌

四、五歳児は、替え歌を作ることが大好きです。わらべ歌、童謡、アニメの主題歌、どんな種類の歌でも、言葉を入れ替えて、替え歌にします。私達の調査期間中にも、子どもたちは、「あんたがたどこさ」、「お正月」、クレヨンしんちゃんの「おらは人気もの」などの替え歌を作り出しました。

事例4　クレヨンしんちゃんの

「オラは人気もの」の替え歌

一九九三年八月二十七日[注4]

こひつじ保育園五歳児クラスの子どもたちが全員で「演(だ)し物ごっこ」をしています。子どもたちはグループで、あるいは一人で、皆の前に出て、アニメの主題歌「美少女戦士セーラームーンR」、山本リンダの「どう

にもとまらない」、アニメ・クレヨンしんちゃんの主題歌「オラは人気もの」と、歌い進めます。このあと、ゆうたくん（五歳〇ヵ月）は、他の子どもたちから「クレヨンしんちゃんの替え歌を歌って」とはやし立てられて、この歌をサッカー・Jリーグの歌に見事に作り替えて歌いました。括弧の中は、新しく作り出された歌詞です。

「パワフル、パワフル、パワフル、ぜんかい／なーあ、みさえ・（ひろし・ー）／いちにち・げんきだゾ・ー、しんのすけ！（ひろし！）／ナン・パをするなら・ー（なが・らくおまたせ・ー）／まか・せーておくれよ・ー（歌わず）／さん・にんもよにんも・ー（ひゃく・にんもせんにんも・ー）／おし・がかんじん・ー／カモンベイビィ・カモンベイビィ（カモンヴェルディ・カモンヴェルディ）／たまねぎ・たべれる・ー（かわさき・おおさか・ー）／そーんなめーして・みつめちゃテレるぜ（テレない）／ぞーさん・ぞーさん・オラは（カズは）／にんきもの・ー（もえている・ー）パニック・パニック・パニック・みんなが／あわてる・ー（あいしてる・ー）／オーラはすごいぞ・てんさいてきだぞ（てんさいてきじゃない）／しょうらーい・たのしみだ・ー（たのしみじゃ・ない）」

ゆうたくんは、原曲の歌詞のフレーズ（すなわち、ひと呼吸で歌う歌詞のまとまり）単位に、あるいは、拍節単位に、言葉の入れ替えを行って替え歌を作っていることがわかります。ここでも子どもたちが呼吸単位に言葉を組織づけていることが明らかです。そして、五歳児もまた、否定語による言葉の変形を楽しむことが「テレない」「てんさいてきじゃない」「たのしみじゃない」という歌い替えに現われています。

幼児期の子どもたちが、どのように言葉あそび、歌遊びを工夫して作り出しているのかについて、四つの事例をとりあげて、その音楽的側面を中心に、分析、考察を行いました。四つの事例に共通して言えることは、この年齢の子どもたちの言葉あそび、歌遊びが、呼吸単位に言葉の音響面を組織づけるという、音楽的な行為に基づいているということです。ここにとりあげた否定語による応答、七五調の唱え言葉、替え歌は、広大な言葉遊び、歌遊びの世界の、ほんの一部であり、その入口を示すものに過ぎませんが、数ある伝承的な言葉遊びの多くが、口調の良さを楽しむものであることから考えると、言葉遊びとは、子どもにとっても、大人にとっても、基本的には、言葉を音楽的に組織づける探索遊びなのではないかと考えさせられます。言葉遊び、歌遊びを、それが作り出された文化における人々の音楽づくりの方法との関係においてとらえるとき、その広がりとつながり、そして楽しさの本来の姿を、これまで以上に知ることが出来るに違いありません。

（国立音楽大学）

注

1日本の子どもたちの音楽行動に見られる。呼吸単位に音響を組織づける方法を、私は「音楽的表現の形式」と呼んでいます。本連載四月号参照

2筆者と国立音楽大学幼児教育専攻卒業研究グループが、東京都小金井市にある、愛の園保育園において、一九八九年に行った二歳児クラスの子どもたちの音楽行動の研究の資料に基づくものです。筆者と国立音楽大学幼児教育専攻四年の鈴木規永他三名が観察を行いました。

3筆者と国立音楽大学幼児教育専攻卒業研究グループが、東京都東大和市にある、こひつじ保育園において、一九九一年に行った三歳児クラスの子どもたちの音楽行動の研究の資料に基づくものです。筆者と国立音楽大学幼児教育専攻四年の西浦志津他二名が観察を行いました。

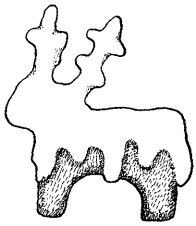
4前述のこひつじ保育園で、一九九三年に行った三歳児クラスの子どもたちの音楽行動の研究の資料に基づくものです。筆者と国立音楽大学幼児教育専攻四年の松井久美他一名が観察を行いました。

私が経験した『保母』という仕事

――その二――

子どもとのかかわりから

四宮　美帆



二年間勤務した保育園を退職した直接のきっかけは出産だったが、保育園という環境の中で自分の思いとかけはなれた保育しかできなかったことや、他の職員との関係がうまくとれなかったことが退職を決意させた大きな理由になった。今回は子どもとのかかわりという視点から二年間の記録を振り返ってみたい。

子どもとかかわったことについての純粋な記録は数少ない。それは前回書いたように大人（職員）との関係に多くのエネルギーを費やしていたことが理由の一つである。私の勤めていた保育園

では、保育や子どものことについて話し合う時間が十分になく、そのために職員どうしが思いや意見を交換することが十分にできなかった。私はそのような中で、先輩保母からの自分への評価ばかりが気になり、そのために不安にもなり、自分の保育に集中することができなかった。また、日々の生活の中で子どもの生き生きした姿を嬉しく思ったり、子どもの何気ない言動に感じいったりすることは幾度となくあったが、そのことよりも私の心の中を大きく占めていたのは、保育園という環境の中で、自分の理想とは程遠い保育しかできないことへの悩みだった。それゆえ数少ない記録のほとんどは、子どもの姿の記録ではなく、自分の心中の記録となっている。

平成八年五月十六日

大勢の子どもを一人の大人が保育するとなると、子どもの注意をうまくひきつける技が必要になってくる。その技をもちつつ、子どもの気持ちに共感することで、場も混乱せず、且つ子どもの気持ちを尊重した保育ができるのかもしれない。しかしこの技は、ほとんどの場合、子どもを守る大人の視点からのものである。そうなると大人の視点をもちつつ、子どもの心に共感しなければならないことになる。なんだか矛盾していて難しい。

平成九年四月十一日

十七人の子どもとつきあっていると、聞きたい話もあるし、受け入れたいこともあるが、状況的に受け入れられないこと、私が精神的に受け入れられないことがたくさんある。子どもの思いを大切にしたいと思い、一人一人の言葉に丁寧に耳を傾けていると、十七人分もの思いを

とても受けきれなくて、爆発しそうになる。

――中略――個々の伸び伸びとした活動を尊重しながらも、集団生活をする上でのある程度の決まりは守ってもらわなければいけない。同じ決まりに対しても、心の負担はその子によって違うが、一方には許し、一方には許さないというのも都合が悪い。

平成九年五月二十八日

子どもを受け入れるということ。

子どもの思いに耳を傾け、その子がその子らしく過ごせるよう援助する。そのことは良く分かっているつもりだが、実際子どもと向き合う場面になると、迷いが出てくる。こちらの意図にそった活動、習慣、常識ばかりを押し付けてはいけないが、ある程度それがないと集団の生活はできなくなってしまう。その子の思いを叶えてあげた方がいいのか、全体を考えて我慢してもらった方がいいのか。――中略――外で遊びたい人、テレビを見たい人、寝たい人、それを一人一人がやり出したら全体の不都合になってしまう。それをどこまで説明し、協調してもらっていくか。考え出すと分からなくなっていく。

平成九年七月二十八日

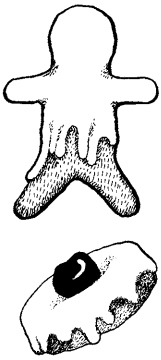
子どもとのかかわりの中で子どもを受け入れる余裕をなくしている。一人一人と向き合い、現状の中で何ができるか、限界まで頑張れているか。一通りの仕事だけこなして、自分を守ることで精いっぱいで、子どもに無理がいっているのではないか。私にも限界があるにしても、そのずっと手前のところで妥協して、妥協とも思わず、関係を力で解決してはいないか。

平成九年九月二十二日

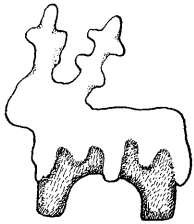
とにかく疲れた。子どもに楽しく提案したいと思いながら、その余裕がない。何のための発表会なんだろう。『やりたいことをやる』『やらなければいけないこともある』どちらをどれだけ伝えればいいのだろう。歌を歌う、みんなで声をそろえる、決まりを守った表現をする、挨拶をする、そういうことは大切なことなのか、そうでもないことなのか。――中略――わたしがやろうと決めたことに子どもがついてこないとき、何が魅力的じゃないのか、どうしたらついてきてくれるかを一通り考える。それでも余裕がないときには『何でやらないの』としかってしまう。確かに、何でやらなければいけないんだろう。周り（他の職員）からのプレッシャーを私が受けられない分、子どもにつけをまわしている。

＊

私は何よりも子どもの数の多さに戸惑った。一人の保母が担当する子どもは幼児なら二十～二十五人、乳児なら五～十人。交代勤務もあるので、多いときは幼児なら五十～六十人、乳児なら十五～二十人の子どもを一人で保育しなければならない時もあった。そうなると、一人一人の思いを受け止めるどころではない。大勢の子どもが限られた空間の中で安全に過ごせるようにすることで精一杯である。私にとっては一人で二十人程の幼児と関わることも難しいことだった。それぞれの子



が生理的リズム、感情のリズムをもっている。それぞれの子が興味、好奇心、意欲をもっている。それを限られた環境の中でどう発揮してもらうか。また私がどの程度一人一人の子に向き合えるか。無力感と反省の毎日だった。しかしそのうちその感覚は麻痺し、とにかく次から次へと現れる行事の企画、形にしなければならない製作物、書類書き等の『仕事』に追われる余り、子どもとの関わりについて考えなくなってしまった。だんだんと要領を得、『集団になった子どもを動かす技術』を使って、子ども達をタイムテーブルにしたがって流しているにすぎなかった。その流れに乗れない子は怒りもしたし、たたきもした。その子の気持ちなど考えもしなくなった。子どもとのそういう関わりは後味の悪いものだったが、以前のように悩んだり、反省したりすることはなくなった。とにかく形ある『仕事』をこなせるようになることによって、先輩保母からの評価が高くなり、関係ができてくるに従って、ますますその目を無視することはできなくなった。評価されることは正直いって嬉しく、私のやりがいにもつながってきたのである。そのことがますます子どもとの関係をないがしろにすることを助長した。

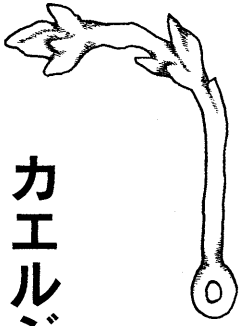


保育園での生活は、子どもにとっても大人にとっても『集団』ということが第一にある。集団の構成員それぞれが集団の良さを経験しながらも、個として充実して過ごせれば何よりもいい。しかし集団である以上、完全に一人一人にとって理想的な自己実現の場であり得ないのが現実だろう。様々な障害、矛盾が存在するはずである。む

しろ完全になり得ない現実を受け入れて、その中にこそある良さや面白さを積極的に生かしていくことが大切なのだと思う。私は保母として子どもに対し、必ずしも思い通りにならない現実の中で、どうやったら自分をコントロールして楽しむことができるか、その手段を教えたり、きっかけを与えたりしていけば良かったのだと思う。また私自身もそのような視点をもって日々過ごせば良かったのだと思う。

今、仕事を離れて思うのは、私は集団となった子どもと関わること自体に戸惑い、しかも一人で相手にする子どもの多さにも戸惑っていたのだと思う。それに加え、本来ならそれらのことを共に乗り越えていくはずの仲間の力を借りることができず、どんどん余裕や自信をなくしていったのだ。この先この仕事を続けていけば、まだ先があったと思う。少しずつでも私なりの保育ができるようになったかも知れない。今の段階、私の能力では一度に二十人もの子どもの気持ちを受け入れることはできなかったし、保育園という物理的、時間的制約の多い環境で（もちろん同時に守られていたことも多いのだが）、私らしい保育をすることはできなかった。どうすれば良かったのか、それで私は何ができるのかはよく分からない。しかしいまだに学生時代に興味を持った『子育て支援』に対するこだわりは捨てきれずにいる。いつかはなんらかの形で必ず実践したいと思っている。そのとき、今はただ苦いだけのこの保育園での経験が生きてくれればいい。

（元神奈川県公立保育園）



子どもの本から

カエルジャンプでとびこえたもの

大沢啓子

「かえる」って、何か興味をひく動物だと思いませんか？　水の中をすいすい泳ぐおたまじゃくしは子どもたちの人気者。手足がはえて大人になり、水のなかからとびだしても、平気でぴょんぴょんはねまわります。空までとんでいきそうないきおいで、水も陸も空も自由に動きます。

この絵本、『かえるくんは　かえるくん』の主人公のかえるくんも自分自身のすばらしさにほれぼれし、「ぼくは世界一の幸せ物」と無邪気に自分を信じてすごしていたのです。

ところがちょっとまわりをみまわしてみると、何だかすごいことのできる人がたくさんいることに気づきました。

いつも水辺で遊んでいたあのあひるが空をとん

だり、ねずみがものを作るのが上手だったり。くいしん坊でたべるだけしか能がないと思っていたこぶたは、何とお料理が得意で、おいしいケーキも作ってしまうのです。おまけに、いつものんびりそうにしているのうさぎが、すごい読書家だということがわかって……。

◀『かえるくんは　かえるくん』
マックス・ベルジュイス文と絵　清水奈緒子訳
セーラー出版　一九九七年

小さなかえるくんの頭は、ショックのあまり大混乱のようです。――ぼくは世界一だったはずなのに。

かえるくんはもちろん全てに挑戦してみました。ジャンプだけではなくて、あひるくんのように空をとびたい。いろいろ考え、シーツでつばさを作っておかの上から空へむかって足をけりました。でも、とべたと思ったのは一瞬で、まっさかさまに川におちました。ケーキ作りも失敗。本なんかちんぷんかんぷんで、らくがきにしかみえません。

ぼくは空もとべない、ケーキもやけない、本もよめない、……ない、……ない、……できない。何もできないただの頭の悪いみどりのかえるなんだ。かえるくんの心の中は劣等感のかたまりです。この前までは幸せの絶頂だったのに、今は不幸のどん底で

す。

自己嫌悪と憂鬱――こんな時期を誰もが経験したことがあるでしょう。この混沌とした自己嫌悪の中から自らのアイデンティティを見つけだし、かえるくんは子どもから大人へと成長していきました。

そう考えると、この本はすごい絵本です。〝井の中の蛙……〟なんてものではなくて、かえるくんの自分探しのお話だったのです。

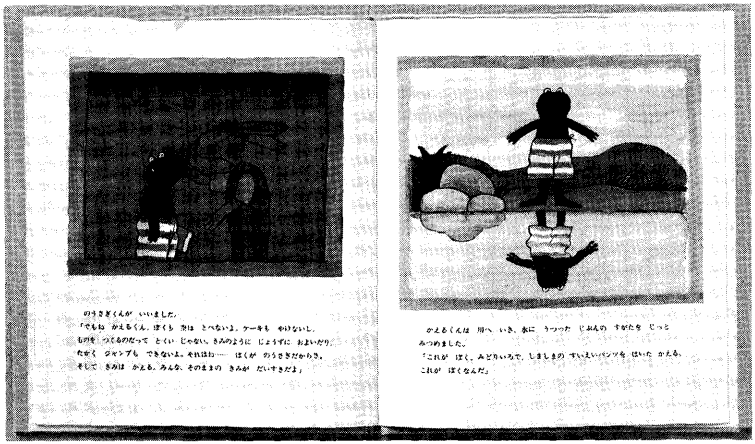
その成長の過程は、かえるくんのユーモラスで人間的な表情や行動として、画面の随所に細かく描かれています。例えば「とびたつ」ということ。

絵の中でかえるくんは、三回とびたっています。

はじめは、あひるのまねをして。これはみごとに失敗。

二度目は、いろいろ考えて一週間かかってシーツで翼をつくりました。この時のかえるくんの得意そうなポーズは、この本の表紙にもなっています。そして次のページをめくると、かえるは空へ向かってとび上がります。紙面いっぱいに広がり画面のわくをはずして、二ページにわたり大空をとぶかえるの姿が描かれています。でもそれはかえるくんの、とべたらすばらしいなという大きな夢なのかもしれません。そういえばとびたつ前の空き箱に立つかえるの姿はいかにも子どもっぽく、手をぐっとにぎりしめ、翼を心のよりどころとしているのがよくわかります。思春期とは、何かにしがみつかずにはいられない時期なのでしょう。

そして三度目。最後のページは本当のかえるくんの姿です。空にむかって高く高くジャンプする姿は先程のようにわくを越えてはいません。これが現実のかえるなのでしょう。ここに描かれているのは画面におさまりながらも「天にものぼるここち」のかえる。気持ちと行動がぴったり合った等身大のかえるでした。



▲「これがぼく、みどりいろで、しましまのすいえいパンツをはいたかえる、これがぼくなんだ」

その前のページには、川の水にうつった自分の姿をじっとみつめるかえるが描かれています。はじめて本当の自分と正面から向きあうことができ、自分をみつめ、改めて自分を発見できたかえるくんの姿があります。これがあったからこそ、最後の気持ちのよいとびたちができたのでしょう。

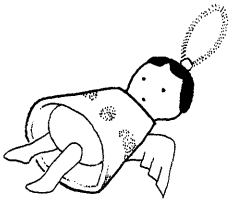
ここにくるまでには、まわりの人たちのすばらしい協力と援助がありました。うさぎやねずみのやさしい言葉にはげまされたのです。「きみはかえる。みんなそのままのきみが大好きだよ」。

他人と同じようにはできない、ということばかり気にしている時はわからなかったことが、自分はこんなことがこんなにできる、という見方に気づいた時、かえるは自分のアイデンティティをたしかなものに作っていったのでしょう。

（舞々同人）

保育巡回相談事例に学ぶ

吉川はる奈



「すべての保育園、幼稚園で障害があるといわれる子どもも受け入れよう」という動きの中で、保育上生じうる保育者の悩みを互いに出し合い、次の保育に生かしていこう、学びあっていこうという目的で、T市の保育巡回相談は二十年前にスタートしました。私自身はそのうちの最近十年間を保育巡回相談員として保育園におじゃましています。今では園長先生や担任の先生をはじめ調理の方、看護婦さん、用務の方など様々な保育園のスタッフと顔見知りになり毎回話はつきません。

子どもたちの歩みの幅広さと奥深さは想像を

はるかに超え毎回とても新鮮な気持ちになります。

とはいえ「相談」ですから保育観察後のカンファレンスでは保育者全員が出席しさまざまな悩みが打ち明けられ、ぶつけられますので緊迫した時間も味わいます。

いつも生活を共にしている保育園のスタッフから子どものなまの姿、エピソードが次々出されていきそのすべてが説得力をもっているのでカンファレンスは出口の見えないトンネルに入り込んだような場となることが多いです。保育者とは異なる職種としての相談員の私以外に地域療育センターのケースワーカーや保育課の職員も同席します。以前に行った巡回相談に関する保育者の意識を調査したアンケート結果からは、異なる職種も含めたカンファレンスから得られた糸口が保育に直接に影響を与えるというよりはカンファレンスを行うこと自体が事例を共有し、園の保育者全体の意識の連携、高まりにつながるということが明らかになっています。事例を通して学ぶことの大切さということでしょう。

本稿では巡回相談の事例を通して保育者の保育上の悩みについて様々な角度から考えてみたいと思います。

M子は非定型自閉症、精神遅滞で保育園の三歳児クラスに入園してきました。福祉事務所からの説明では、M子は言葉がなかなかでないとのことで保健所で言葉の相談を継続して後、二歳半ころから週に二回地域療育センターに通所していたとのことでした。

かわいらしい色白の女の子で一人っ子。お父さんもお母さんもM子をとてもかわいがってい

るのだとケースワーカーからききました。

地域療育センターより入園前の様子を次のように説明されました。パニックをよくおこすものの予期しない事態に対してであること、センターのほかの子どもへの関心は高く他児の動きをみて行動することがときどきあること、ことばもおうむ返しから生活上必要な実用的ことばへと広がりをみせているとのことでした。

三歳児クラス春

M子が入園した三歳児クラスは男の子四人女の子九人の十三人のクラスです。先生は二人です。

はじめはM子はほかの子どもの遊具を黙ってとってしまったり、遊びを中断させてしまったりして、M子が近づくとほかの子どもが「だめー」と叫ぶことが多くみられました。M子もほかの子どもたちもおちつかないという感じでした。

このときのカンファレンスではM子の遊びについて様々な悩み意見が出されました。担任の先生はどこへ行っても「だめ」と叫ばれるのではM子も遊びがみつからないのではないかと心配していました。またほかの子どももびくびくしながら遊ぶのでじっくり集中できないのではないかとの声もきかれました。M子にあった遊びを提供することはできないものかということに話が集中しました。

M子が気に入っている遊びは何だろうということになりました。ただことばの問題も話題になりました。何しろおうむ返しで表現することの多いM子です。おままごと、人形遊びならど

うだろうということでままごとコーナーを充実させてみることになりました。でもひとりで人形遊びを繰り返すことになるのではということも危惧されました。

また一方でM子のもつ「非定型自閉症」という診断名に話が集中しました。担任の先生は「目の前のM子の姿を第一に考えようとしつつ、でも頭のどこかで診断名が気になり次に自分の保育上の動きが気になってくる」と話されました。入園した年でM子の気持ちが安定するような環境作りへの試行錯誤とそれに対する不安がひしひしと伝わってきました。まずは園生活を安心してすごしてほしいと願い、さまざまな試行錯誤をする上で「これでいいのだろうか、自分の接し方でM子の育ちが悪くなることはないだろうか」という不安がつきまとう、と担任の先生は話されました。M子の成長は本当にゆっくりですから、毎日生活を共にしている先生にとっては「変化がみえにくい」＝「歩みを感じられない」＝「自分に問題があるのではないか」と悩むのでしょう。またご家族は登園時のM子の大泣きに不安をもちつつも新たな園生活でのM子の成長を期待しているようで、それもおおきなプレッシャーだったのかもしれません。

M子はままごとコーナーをお気に入りの場所にして園生

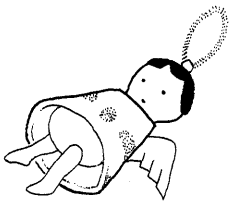
活を生き生きとおくるようになっていきました。まずはままごとコーナーへ向かい自分の場所を意識し一日をおくるようになっていきました。

四歳児クラス夏

四歳児に進級し、クラスも男の子十人女の子十五人の計二十五人となりました。担任の先生は二人です。

他児のおもちゃに黙って手を出していたM子も、クラスの子どもの名前を覚え始めました。名前だけなのですが、不思議なもので友達は名前を呼ばれると表情が和らぎます。たとえ名前だけでなんだかわからずに会話がとぎれても子どもたちの遊びは中断しません。

そのうちクラスの子どもの名前を口にし、「〇〇ちゃん積み木しよう」と誘うことが出来ました。また「せんせいみて！　みて！」と自分の感動を口にしたり、「〇〇するの（〇〇したい）」ということから「〇〇してください」ということばでの要求が的確になってきました。もちろんこれらは時折みられることですが、遊びでは他児とごっこ遊びをすることが確実に増えました。M子は自分の与えられた役を一生懸命続けます。



M子が発することばがテーマからずれていても決まった口調が使われていても子どもは気にせずストーリーを展開させていきました。こんなふうに受け止められていることはM子にとって大きな成長の土台になったことと思います。

ご家庭も園で遊ぶM子の姿にとても喜んでいるという話がケースワーカーからだされました。

四歳児クラス秋

筆圧が弱く描くことはしなかったM子が自分の顔を描いてみるようになりました。ままごとコーナーの横のお絵かきコーナーで描いていました。線は思うようにならないものの目、はな、くち、髪と描いていきます。ままごと以外で遊ぶ姿がみられ、ことばも生活、遊びの中で多くみられるようになりました。

保育者全員がM子の成長を実感し、その上で「もっと言葉で表現できれば……」という声があちこちから出、「言葉を促すためにいい方法はないのか」「園でM子と個別に『向き合う』時間を作るべきではないか」ということが話題になりました。これだけ成長したのだからもっと、もう少し成長すれば遊びでもほかの子どもとより楽しめるのではないだろうかということです。M子の成長を願う保育者たちの熱い気持ちです。

一人一人の育ちにあわせた保育の大切さが保育指針の改訂で強調されて以来、障害があるといわれて入園してくる子どもによりよい方法でその子どものための『特別メニュー』を提供したいという話に発展することが最近特に多いように思います。『特別に』『個別に』という言葉ばかりが先行し、園生活から切り離された形で無理に作り上げることは何か残念に思います。

五歳児クラス夏

年長児となりクラスは男の子十一人女の子十四人で二十五人。先生は二人です。

M子は身長が伸び、髪の毛をきれいに三つ編

みに結い、なんだか年長児のりりしさを感じさせるような姿に私はとても驚きました。ごっこ遊びが大好きですが、役へのなりきり方も驚きました。ドレスを来て女の人になりきりながら買い物ごっこで遊んでいます。ただひとり劇をしているという印象でした。しかしM子は友達が歌を歌い出せば自分からそちらに入っていったりもします。家庭ではこのようなM子の落ち着きにとても喜び学習する姿勢を身につけさせようと数字を教えはじめているようでした。その教え方が話題になりました。就学を控え何でもいい少しでもわかることを増やしてあげたいという親心によるものと思われました。ケースワーカーはご両親はとても熱心にM子にむきあっていると話されました。一方保育者からはご両親はめざす方向がずれているように感じると出されました。このようにケースワーカーが感じているご家族の姿と保育者が感じている姿とが大きく異なり、全員が絶句してしまうこともあります。異なる職種で構成するカンファレンスならではの事態です。しかし感じ方の違いによるものだけでなくご家族が相手によってコミュニケーションの取り方を変えているという場合も多いのです。「本音をいう」相手は多くの場合たくさんではないからです。保育者間でさえ大きく異なるでしょう。

子どもたちの成長を願う熱い気持ちは共通です。共通な願いからでる様々な声が少しでも子どもたちにとってよりよい保育へ生かされる様に……そんな思いで今日も巡回相談へ出かけていきます。

（お茶の水女子大学）

幼児の教育　第九十七巻（平成十年）総目録

◇一号

ある日
夢の日々(三)　目玉は一人一人の子ども
　の中に　大多和　檀
「児童の世紀」を振り返る―その五―
　本田　和子
今、マレーシアでは…　小林　美実
「音の動き」の場から　津守　真
子ども時代と私(10)　田圃の中の徘徊塾
　古市　憲一
子どものいる暮らし
　「とーたん」と呼ばれて　島田　聡
滄桑の街・香港から(2)　今井　七重
子どもの森幼児教室での保育
　内田　幸一
子どもの本から　白銀は招くよ
　皆川美恵子
ある日の育児日記から(85)　佐藤　和代

◇二号

カウンセリングという楽しみ
　信田さよ子
子どもの生活と福祉の歴史(6)
　乳児死亡問題と乳幼児健康相談事業
　松本　園子
現象学から保育の世界を見る(6)
　遊びへの参加とことば　榎沢　良彦
対策ではなく、本人の必要を
　津守　真
ある日の育児日記から(86)　佐藤　和代
特集〈育てる〉
　マラリヤ原虫を育てる　渡辺　純一
　小さな命を見つめて　高柳　芳恵
　魚の育成について　石塚　治男
　ザリガニの赤ちゃんと共に育つ
　阿部　康子
滄桑の街・香港から(3)　今井　七重
あそびはらっぱものがたり―ふゆ―
　すとうあさえ

◇三号

「児童の世紀」を振り返る―その六―
　本田　和子
震災後の子どもたち(19)
　巣立つ子からの贈り物　森末　哲朗
二十五年ぶりの教育実習―イギリス公立
　幼稚園保育参加顛末(1)―　豊田　一秀
子どものいる暮らし　子どもを育てる
　ことと研究することの間　無藤　隆
門の内に入って来られない子ども
　津守　真
ある日の育児日記から(87)　佐藤　和代
心の動くままに遊べるようになるまで
　伊集院理子
滄桑の街・香港から(4)　今井　七重
夢の日々(四)　二人で入園し、三人で
　卒園(三)　大多和　檀
子どもの本から　おつきさまにとどく
　ぐらいすき　仲　明子

◇四号

ある日　津守　真

子どもの生活と音楽(1)　「数かぞえ」のバリエーション　藤田芙美子

子育ての心理(1)　現代家庭における文化継承機能の衰退　楡木　満生

子どもにとっての仲間の意味について考える　中島　寿子

大人の保育と子どもの保育　津守　真

滄桑の街・香港から(5)　今井　七重

ある日の育児日記から(88)　佐藤　和代

小さな体験から　桝田　正子

保育者の眼差し……担任という視線　矢萩　恭子

保育の本から『保育者の地平』を読んで　松沢　孝博

◇五号

幼稚園教育に学ぶ　小川　聖子

子どものいる暮らし

共に過ごす暮らしの中で　新山　裕之

「児童の世紀」を振り返る―その七―　本田　和子

遠くを眺める　津守　真

ある日の育児日記から(89)　佐藤　和代

幼稚園の日々　片隅の自然の魅惑　樋口早百合・無藤　隆

震災後の子どもたち(20)　わたしも子どだったときに　上崎　温子

『ポケットモンスター』考―人気ゲームの光と影　山本　政人

夢の日々(五)　枝の一生　大多和　檀

滄桑の街・香港から(6)　今井　七重

A夫との日々　吉岡　晶子

◇六号

ある日　津守　真

子どもの生活と音楽(2)　周囲の音や音楽に注目し、探索する　藤田芙美子

子育ての心理(2)　現代のあるべき父親像とは　楡木　満生

二歳児の「独占する」ということの発達的意味　阿部　和子

水をあふれさせる　津守　真

二十五年ぶりの教育実習―イギリス公立幼稚園保育参加顚末(2)―　豊田　一秀

ある日の育児日記から(90)　佐藤　和代

ムクロジとの出会い　前田志津子

倉橋惣三『保育法』余聞(4)　幼児の表現論(一)　土屋　とく

さまざまな出会いをとおして　岩間　里香

◇七号

「児童の世紀」を振り返る―その八―　本田　和子

スラム街と難民キャンプの子どもたち　小林　美実

自分らしさが響きあう保育実践の創造を　加藤　繁美

幼稚園の日々　小さなもののきらめき　樋口早百合・無藤　隆

砂の中に手をかくす　津守　真

仮想世界に出口はあるか―情報社会のなかでさまよう心　山本　政人

ある日の育児日記から(91)　佐藤　和代

子ども時代と私(11)　都心生まれの大正時代　塚本　福
夢の日々(六)　次の「夢の日々」へ出発　大多和　檀
今、大切にしたいこと　尾形　節子
子どもの本から　本に願いをこめて　皆川美恵子

◇八号
子どもの生活と音楽(3)　プール遊びに　藤田芙美子
見られる音楽的な熱中　清原　規子
共に育つ保育者と子ども
倉橋惣三『保育法』余聞(5)　土屋　とく
幼児の表現論(二)
ある日の育児日記から(92)　佐藤　和代
近寄る―限られた空間が広い世界に　津守　真
開かれるとき―
特集〈緑蔭図書紹介〉　川端　康雄
翼ある言葉をかけて
人間教育のエッセンス　伊藤美奈子
『シーラという子』
こころのための処方箋　吉増　克實
「わかる」ということ　友定　啓子
―二冊の書物から
保育園をのぞいてみたくなる本……　吉川はる奈
『バオバブ広場にようこそ！』
子育ての心理(3)　遊びこそ、子どもに　楡木　満生
とってのお仕事

◇九号
ある日
二十五年ぶりの教育実習―イギリス公立　本田　和子
幼稚園保育参加顛末(3)―　豊田　一秀
「児童の世紀」を振り返る―その九―
子どものいる暮らし　子どもによって　相原　貴史
育まれたもの
最近の身辺から　津守　真
特集〈笑う〉
「笑う」こと、「泣く」こと　杉本さおり
笑いのすすめ　山本　聡子
微笑みを声と手にのせて　猪平　眞理
理想的でなくてもいい、多少でも　土屋　賢二
笑えれば
笑ってはほしいけれど　河合　聡子
「黄金のがちょう」と笑わない
お姫さま　早川　麻里
W子の葛藤　上坂元絵里
ある日の育児日記から(93)　佐藤　和代

◇十号
ある日
子どもの生活と音楽(4)　子どもたちの　藤田芙美子
周囲にある慣習的な音楽行動
映画のなかの先生と子どもたち　山田　博之
私が経験した『保母』という仕事　四宮　美帆
―その一―
子ども時代と私(12)　小学生の頃　尾田　幸雄
空に連なる地平(1)　津守　真
保育者として成長していくこと　梅田　優子

想像と現実のはざまで―遊ぶことと　山本　政人
生きること
ある日の育児日記から(94)　佐藤　和代
子どもを育てているのは誰？杉浦真紀子

◇十一号
『おもちゃ革命』のゆく先　森下みさ子
子どものいる暮らし
親子げんか顚末記　佐藤　敬治
子ども時代と私(13)
空からの刺激とともに　旭　スズヱ
「児童の世紀」を振り返る―その十―
本田　和子
幼稚園の日々　小さな場所が子どもの
力で変貌する　樋口早百合・無藤　隆
空に連なる地平(2)―虹―　津守　真
草原を駆ける馬　清宮　聡子
ゲームの面白さについて　山本　政人
直君に教えられたこと　橋本　由美
ある日の育児日記から(95)　佐藤　和代
保育の本から『保育環境論』を読んで
石井　叔子

◇十二号
空に連なる地平(3)―まひるの歌―
津守　真
「伝統的子育て」に潜むもの
立浪　澄子
二十五年ぶりの教育実習―イギリス公立
幼稚園保育参加顚末(4)―　豊田　一秀
ある日の育児日記から(96)　佐藤　和代
幼稚園の日々　工夫し挑戦する
樋口早百合・無藤　隆
子どもの生活と音楽(5)
言葉遊び・歌遊びの世界　藤田芙美子
私が経験した『保母』という仕事
―その二―　四宮　美帆
子どもの本から　カエルジャンプで
とびこえたもの　大沢　啓子
保育巡回相談事例に学ぶ　吉川はる奈
第九十七巻総目録

幼児の教育
第九十七巻　第十二号
（一九九八年十二月号）
定価五五〇円（本体五二四円）

発行　平成十年十二月一日
編集兼発行人　田代和美
発行所　日本幼稚園協会
〒112―8610 東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108―8620 東京都港区三田五―一二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113―8611 東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六一三（営業）
☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

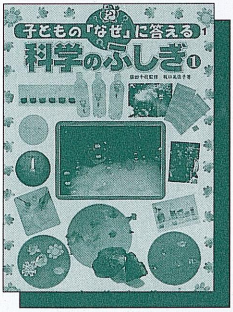
子どもの「なぜ」に答える〈全4巻〉

藤田千枝　監修　セット定価：本体9,200円＋税

好評発売中！

子どもの好奇心は宇宙をものみこむほど広く大きく、大人は鋭い質問にたじたじする経験もさせられます。
この好奇心をうけとめ、しっかりのばす手助けをしたいと願って生まれた、自然と科学の遊びシリーズ。

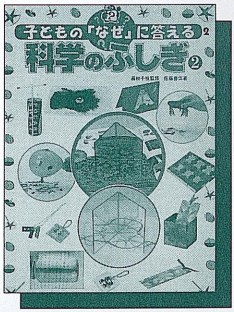
1．科学のふしぎ①



水、波、風、石、そして太陽の光などの自然現象のなかへ子どもをつれだし、充分にその現象を体験させる方法がていねいに書かれ、さらにこの体験を科学的な考え方につなげる遊びや実験が紹介されています。

坂口美佳子・著
Ｂ５変型判　120頁　定価：本体2,300円＋税

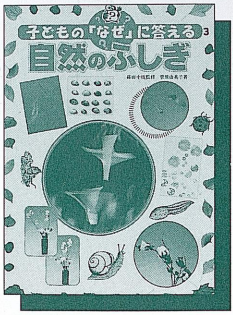
2．科学のふしぎ②



紙や、コップ、ペットボトルなど、身近にある材料を使って楽しいおもちゃをつくりながら、空気、音、光、磁石などと仲良しになろう。気楽に学べ、新鮮な驚きがいっぱいの科学遊びを集めています。

佐藤善江・著
Ｂ５変型判　120頁　定価：本体2,300円＋税

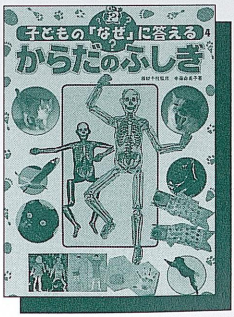
3．自然のふしぎ



お散歩や遠足で野外にでると、そこは遊びの宝庫です。どこでも見られる草花やタネ、虫、カエルたちは、いつでも自然遊びの相手をつとめてくれます。そして、水族館や動物園ならもっとすごい発見があるでしょう。

菅原由美子・著
Ｂ５変型判　120頁　定価：本体2,300円＋税

4．からだのふしぎ



動物や人間の“からだ”に関する遊びをあつめました。匂いをかいで見えないものの正体をあてる遊びを、虫に鼻があるかな？という好奇心をそそる問いかけにつなげ最後には、がいこつの模型までつくってしまいます。

赤藤由美子・著
Ｂ５変型判　120頁　定価：本体2,300円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第九十七巻　第十二号　平成十年十二月一日（毎月一回一日発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

定価　五五〇円（本体五二四円）☆

倉橋惣三の「保育者論」

倉橋惣三が折にふれ書きとめた
「幼児の教育者」「保母諸君と語る」「教師論」からなる保育者論。
倉橋は保育者に何を望み、どんなことを期待していたのか。
これから保育者を目指す人、今の保育に行きづまっている人、明日の保育を
よりよいものにしたいと考えている
幼児教育関係者におすすめしたい必読の一冊です。

発売中

好評既刊本！

倉橋惣三・著

B６変型判　200頁　定価：本体1,300円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

32 C

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。